

優秀作品集



国際理解・国際協力のための
作文・感想文コンテスト

2014



日本国際連合協会山口県本部

序

国際連合(国連)は、世界の平和と経済・社会の発展のために協力することを誓った独立国が集まって設立された機関で、現在 193 ヶ国が加盟し、日本は昭和 31 年(1956 年)に加盟しました。

山口県では、昭和 27 年(1952 年)に「県民の運動として国連の目的実現に協力すること」を目的に、日本国際連合協会山口県本部を設立して以来、県民の皆様に国際社会の平和や安全をはじめ貧困等の諸問題を身近に考えていただき、国連の役割や国際理解を一層深めていただけるよう活動を行っています。このうち、「国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト」、「高校生による国際交流体験感想文コンテスト」では、県内から多数の御応募をいただきました。その中から、優秀な作品を選び、この作品集に掲載しましたので、ぜひご一読ください。

日本国際連合協会山口県本部

本部長 江里 健輔

<日本国際連合協会山口県本部について>

主な活動内容

- 「国際理解・国際協力講演会」等の開催
- 各種コンテストの開催
 - 「国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト」
 - 「高校生による国際交流体験感想文コンテスト」
 - 「外国人による日本語スピーチコンテスト」

ホームページ

<http://unaj-yamaguchi.sakura.ne.jp/>

国際理解・国際協力のための作文・感想文コンテスト2014

優秀作品集

目次

中学生の部 第54回 国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト

- ◆ 特賞 (県知事賞) ※ 全国大会佳作を受賞
『世界の平和と繁栄のため、国連が重視すべき取組』
野田学園中学校 3年 福田 青空 2
- ◆ 特賞 (日本国際連合協会山口県本部長賞)
『もしも私が国連事務総長なら、国連で何をすべきか』
周南市立桜田中学校 2年 高井 愛未 4
- ◆ 優秀賞 (公益財団法人山口県国際交流協会理事長賞)
『もしも私が国連事務総長なら、国連で何をすべきか』
山口大学教育学部附属山口中学校 1年 上田 千和 6
- ◆ 優秀賞 (山口県ユネスコ協会連盟会長賞)
『世界の平和と繁栄のため、国連が重視すべき取組』
～世界中の幸せのために小さな力と大きな力～
高水高等学校附属中学校 3年 松永 希子 8
- ◆ 特別賞 (国際ソロプチミスト山口賞)
『世界の平和と繁栄のため、国連が重視すべき取組』
山口大学教育学部附属山口中学校 1年 札幌 大暉 10
- ◆ 佳作
『東日本大震災の経験を踏まえ、日本が国連で果たすべき役割』
宇部市立藤山中学校 3年 磯崎 純也 12
- ◆ 佳作
『もしも私が国連事務総長なら、国連で何をすべきか』
周南市立菊川中学校 3年 上田 滉也 14
- ◆ 佳作
『もしも私が国連事務総長なら、国連で何をすべきか』
下関市立菊川中学校 2年 福隅 彩可 16
- ◆ 佳作
『世界の平和と繁栄のため、国連が重視すべき取組』
山口市立川西中学校 3年 村田 智美 18
- ◆ 佳作
『もしも私が国連事務総長なら、国連で何をすべきか』
宇部市立川上中学校 3年 若佐 理菜 20

高校生の部第21回 高校生による国際交流体験感想文コンテスト

- ◆ 特賞 (県知事賞)
『二度目の挑戦』
山口県立下関中等教育学校 6回生 金子穂佳 24
- ◆ 特賞 (日本国際連合協会山口県本部長賞)
『未来の自分を見つめ直す』
山口県立防府西高等学校 2年 内田有香 26
- ◆ 優秀賞 (公益財団法人山口県国際交流協会理事長賞)
『韓国、「アジュ、チョアヨ」』
野田学園高等学校 3年 山懸愛菜 28
- ◆ 優秀賞 (山口県ユネスコ協会連盟会長賞)
『山口県高校生友好交流団に参加して』
山口県立下関中等教育学校 6回生 三好彩夏 30
- ◆ 優秀賞 (国際ソロプチミスト山口賞)
『未来のために』
高水高等学校 2年 那須浩子 32
- ◆ 佳作
『オーストラリア語学研修旅行を終えて』
山口県立下関中等教育学校 4回生 石飛哲平 34
- ◆ 佳作
(無題)
慶進高等学校 2年 上原葵 36
- ◆ 佳作
『韓国での出会い』
野田学園高等学校 3年 岡田美胡 38
- ◆ 佳作
『交流で学んだこと』
萩光塩学院高等学校 2年 齊藤由希 40
- ◆ 佳作
『何よりも大切なこと』
高水高等学校 2年 吉川歌織 42

第54回

国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト



優 秀 作 品 集

特賞（山口県知事賞）

※ 全国大会佳作受賞

世界の平和と繁栄のため、国連が重視すべき取組

野田学園中学校3年

福田 青空(ふくだ あおぞら)

私は、小学四年の時にボーイスカウトに入隊をしました。私の親が、多くの人と関わりを持ち視野を広げてほしいと勧めたからです。

中学二年の夏、第十六回日本スカウトジャンボリー、アジア太平洋地域スカウトジャンボリーが、私が住む山口市のきらら浜で開催されました。そこで出会ったのが台湾人のトーマスでした。彼とは英語を使って話しました。はじめは言葉が通じないため、話すのに時間がかかり、上手く思いが伝わりませんでした。しかし、トーマスは中学生の私でもわかるように簡単な英語でゆっくり話してくれたり、私の伝えたいことを一所懸命理解しようとしてくれたりしてくれました。彼のおかげで、とても楽しくて嬉しくて、充実した時間を過ごすことができました。

私はトーマスとの出会いは奇跡だと思います。言葉、文化、生活習慣などが違っても、思いやりや愛情に満ちた対他意識をもつことで心が通じ合うことがわかったからです。

ところで、ボーイスカウトに入隊する前の私は、日本以外の国で大きな災害や戦禍、事故が起きても他人事でした。日本が私の生活の中心であり、私はただ漠然と生き、日本以外の国ことなど、学校の授業で習うこと以外に考えたこともありませんでした。しかし、近年の世界情勢に目を向けると、ウクライナとロシア、ガザ地区のパレスチナ人とイスラエルとの対立、イラク内戦など、民族や宗派などの利益のために何の罪のない子どもたちまでも戦禍に巻き込まれています。テレビのニュースや新聞報道に触れるたびに私の心は痛みます。

現在の国際連合においての各国の話し合いの状況を見てみると、自国の利益ばかりを主張して対立しています。もっとグローバルな視点から、自国の利益のみでは

なく他国を含めた世界全体を考えた話し合いが行われることが重要ではないかと思っています。

紛争が起きて、尊い人命が失われてから活動するのではなく、紛争を未然に防ぎ人類共存に力を注ぐ国際連合になることが、世界平和のためには不可欠だと思います。

これからの国際連合の課題として、私は子どもや老人などの社会的弱者の最優先保護があげられます。どのような状況においても、子どもや老人などの人権や平和な生活は守られるべきだと考えるからです。

私はこれからの未来を担う子どもたちの意見を現代社会に多く取り入れるために、「国際子ども会議」を提案したいと思います。この会議には、国際連合に加盟しているすべての国に、子どもの参加を義務づける必要があります。会議では戦争のない平和な国際社会を築くために、意見を交換します。純粋な気持ちで話し合うことが期待できます。世界の国々はこの中で決議されたことを、総会や安全保障理事会等に反映させなくてはならないことも重要な条件となります。

国家、民族、宗派の対立は、即、人間同士の対立ではなくて、国、民族、宗派の利害が生む対立に他なりません。諸外国の政治体制、民族、宗派の主導権争いによって、人々は戦わざるをえない状況になっている国や地域もあります。戦うことで意思を表す人類ではなく、ゆっくりとした歩みになるかもしれませんが、子どもたちの世代から話し合いにより、人類の進化をめざさなくてはなりません。

私はトーマスに出会い、人と人がつながるといふ人生において貴重な体験をしました。このことを踏まえ、私にできることは、世界平和、人類共存の視点から社会に対して正しい知識を得て、自ら考え判断し意見を持つことです。そして、それを世の中に訴えていく活動をしたいと思います。人と人がつながり大きな輪ができれば、必ず平和な世界になることを確信しています。

特賞（日本国際連合協会山口県本部長賞）
もしも私が国連事務総長なら、国連で何をすべきか

周南市立桜田中学校2年

高井 愛未 (たかい まなみ)

私は今、とても幸せだ。でも、何が幸せなのだろう。家族や友達がいること、学校で学べること、毎日何不自由なく生活できること、これら全てを、私は本当に幸せと思って過ごしているだろうか。いや、それらはあまりに当たり前すぎて、私は幸せだと感じることを忘れてしまっている。大変だ。私の心は、幸せに鈍感になってしまっている。

現在も、世界中のいろいろな所で、戦争は繰り返されている。イラク北部では、アメリカによる空爆も始まった。ロシアとウクライナの紛争も収まってはいない。なぜ戦争は起きてしまうのだろうか。戦争を起こすのは、きつとごく一部の人達で、多くの国民は決して戦争を望んではいないと思う。だったら、その一部の人達を説得できないだろうか。もしも私が、国連事務総長だったら、この説得に力を注ぎたいと思う。戦争は、ある日突然、しかも一瞬にして多くの尊い命を奪ってしまう。住む所も、食料さえも奪い去ってしまうのだ。そこに残されるのは、常に死と背中あわせという恐怖だ。肉親を失った悲しみや怒りだ。家族を失い、食料すら満足に手に入らない状況の中で、どうやって希望を見い出せば良いのだろうか。大切なものを失った絶望感は、やがて憎しみへと変わっていくだろう。そしてそこからまた悲劇が繰り返される。もはや憎しみの連鎖だ。武力では何も解決しない。力でおさえつけて止めることなどできないのだ。必要なのは言葉だ。心だ。だから私は、根気強く語りかけたいと思う。相手を想って語りかければ、心はきっと伝わるはずだ。

でも、平和のためには、それだけでは足りない。もう一つ必要なもの、それは教育だ。いや、学びと言っても良いかもしれない。六九年前、日本は戦争に負けた。しかし、負けたことと引きかえに、多くのことを学んだ。戦争の悲惨さを学んだ。焼け野原となった国を、再生させる術を学んだ。何より平和の尊さを、大切さを学んだはずだ。私が国連事務総長だったら、これら全てを伝えたい。そのためには、

学校を開かなければ。青空教室だっにかまわない。戦争が行われていた国の人達は、日々生きることに精一杯で、きっと勉強どころではなかったはずだ。大人だっか、子供だっかまわない。読み書きを教えよう。計算も教えよう。そして、戦争の悲惨さを話して聞かせよう。命と平和の尊さを話して聞かせよう。まずはそこからだ。知識が身に付けば、考え方や行動だっかきっと変わってくるはずだ。戦後、日本人が必死で勉強して、国を造りあげてきたように、どんな国だっか立て直すことは必ずできるはずだ。自分たちの国を、自分達の手で造りあげていく、その喜びを体験できたら、戦争なんてくだらないことだと思えるようになるのではないだろうか。自分達の国に、自分の未来に希望をいただけるようになるのではないだろうか。全ての国の人達が、そう思うようになれば、戦争は起こらないのではないだろうか。

今こうしている間にも、私と同じ歳の子供達が戦争で命を落としているかもしれない。私は、幸せに鈍感になっている場合ではない。伝えなければいけない。平和の素晴らしさを知っているからこそ、伝えなければならぬのだ。伝えるためには行動だ。なぜなら、想いを乗せた言葉は、きっと他人を変えられると信じているからだ。

優秀賞（公益財団法人山口県国際交流協会理事長賞）
もしも私が国連事務総長なら、国連で何をすべきか

山口大学教育学部附属山口中学校1年

上田 千和(うえだ ちより)

私は今、日本で平和に安全に教育を受けています。しかし、世界では今でも戦争や内戦が起こり、飢えや貧困で苦しんでいる国も多いです。そのため、平和で安全な環境で十分な教育を受けることができない子どもたちがまだまだたくさんいます。

私が国連事務総長なら、世界中の子どもが国籍や宗教、住んでいる場所に関係なく、生きていくために必要な教育を受けることができるようにしたいです。そして、望めば高校や大学などの教育も受けられるようにしたいと思います。

国連は、二〇一五年までに開発途上国のすべての子どもが小学校に行けるようになることを目標としています。けれども、二〇一一年に小学校に通えていなかった子どもは世界に五七〇〇万人いて、二〇一五年になっても二三〇〇万人の子どもは学校に通えないと予測されています。

私は、その原因は国が貧しく学校をつくり先生を雇うお金がないこと、家庭が貧しく学費が払えないこと、戦争や内戦で難民キャンプなどへ避難していて学校へ行けないことなどにあると思います。

世界中の子どもが教育を受ければ、その中からたくさんの人の役に立つ仕事をしたり、偉大な発明をする人がきっと出てくると思います。その仕事や発明で世界中の人々が利益を受けます。そうだとすれば、世界中の人が教育にかかるお金をみんなでも負担しても良いのではないのでしょうか。私は、世界中の子どもが必要な教育を受けるための費用を世界中の人々が広く負担する仕組みを作りたいと思います。

それは税金のように払ってもらい、国連に集めます。車を買ったとき、本を買ったとき、映画を見たとき、外食をしたとき、旅行をしたとき、世界中の人にほんの少しずつ払ってもらいます。一人一人には気にならないほどの少ない金額でも、世

界中から集めればとても大きな金額になります。開発途上国の人にも先進国の人にも払ってもらいます。開発途上国の方は、自分の国の教育が良くなり、自分の子どもが良い教育を受けることができます。先進国の方も、開発途上国の優秀な人が良い仕事をしたり、素晴らしい発明をしたりして、今よりもっと生活が便利になったり豊かになったりできます。国連は集めたお金で、学校をつくり先生を雇います。学費が払えない家庭に代わって学費を払ってあげたり、学費を払わなくても良い学校をつくります。難民キャンプの中にも学校をつくります。

世界中の子どもが十分な教育を受ければ、国と国の争いも宗教同士の争いも、話し合いで解決できるようになっていくと思います。戦争や内戦もなくなっていくと思います。そうすれば難民キャンプへ避難する人もいなくなります。世界中で、戦争のためにむだなお金を使うことも、戦争のために命を落とすこともなくなります。世界中の子どもが十分な教育を受ければ、大人になって仕事をして今の大人よりもっとお金をかせぐことができるようになると思います。そうすれば、貧しくて食べるものが買えなかったり、学費が払えない家庭もなくなっていくと思います。

私は今、日本で安全に学校に通い、安心して教育を受けています。開発途上国に十分な教育を受けられない子どもがいることが信じられません。本当はニュースを聞いたり読んだりしても、どんな様子なのかあまり想像ができません。でも、世界中の子どもが教育を受けることは、結局、私のためでもあるのだと信じています。

優秀賞(山口県ユネスコ協会連盟会長賞)

世界の平和と繁栄のため、国連が重視すべき取組

—世界中の幸せのために小さな力と大きな力—

高水高等学校附属中学校3年

松永 希子(まつなが きこ)

国連、つまり国際連合。この組織の名前を知らない人はあまりいないだろう。だが国連が何を目的に活動しているのか、具体的にどんなことをしているのかを知っている人は少ないのではないだろうか。特に小中学生はなかなか知る機会がないのでは、と感じる。友達に聞いても分からない人が多く、答えられたとしても曖昧だった。私もその中の一人で、あの経験をするまでよく分かっていなかった。

小学校六年の時、私は学校の行事をまとめる運営委員会の委員長を務めていた。そんなある日、先生からユニセフの資料を見せてもらった。そこには私と同年齢くらいの子供たちの姿があった。ただ私たちと違うのは病気や食糧不足で苦しんでいる、ということだった。私はその時とても悲しくなった。しかし、それでも笑って生きようとする子供たちの姿もそこにはあった。この無邪気な笑顔は世界共通。どこの国に生まれても同じ地球で暮らしている限り、「笑顔」だけは奪ってはいけないと感じた。そしてこの子供たちを助けたい、笑顔を守りたいと強く思ったのだ。

その気持ちは運営委員の仲間も同じだった。私たちは「ユニセフ募金プロジェクト」を始めた。できるだけ多くの募金が集まるよう様々なことをやってきた。世界の子供たちの現状やどのくらいのお金でどのような支援ができるのか、などを読みやすく分かりやすいように、絵や図を交えてチラシを作った。また、募金袋や募金箱も自分たちで手作りした。特に興味を持ってもらうことを大切にして、鮮やかに仕上げることを心がけた。それから約1ヶ月間私たちは毎朝、募金箱を持って玄関にたち呼びかけを行った。さらに給食時間の校内放送でもしっかり自分たちの思いを伝えた。

そして集計の日。私たちにとってはこの一途な気持ちがどれほど全校児童のみんな

なに届いたかを確認できる瞬間だった。ありがたいことに目標金額以上の募金が集まった。一円一円にみんなの心温かい思いが込められていると思うと、嬉しい気持ちでいっぱいになった。そして一刻も早く現地の子供たちに届けたかった。数日後、先生から「振り込んできたよ」と聞き、私たちの力が少しでも子供たちの笑顔の源になっているのかな、と考えると私まで笑顔になった。

この募金活動を通して、学んだことはたくさんあった。まず、国連は世界の平和を維持するための組織だと知ることができた。

次に今の生活に感謝しなければならないと感じた。衣食住に困らず、いつも学校で勉強ができる。普通のことだけど、それを毎日当たり前に行っているのは、とても幸せなのだ。それを私たちは心に留めておくべきだ。

そして、一人一人の力は小さく未熟だけどそれらが集まった時には大きな力を発揮することも学んだ。このことは世界の未来のために大切なことだと思う。

これらのことを踏まえ、国連が世界の平和と繁栄のために重視すべき取組は、この組織のことを、もっと知ってもらいたいことだと考える。そして私が小学校の時にやった募金活動のような小さな取組を広げていくことも大切である。また、広い世界をよりよくするためにはそれに見合った大きな力も必要になる。それを叶えるためには世界の国々の様子を知ってもらい、ここでの様々な活動の協力をもっと強く呼びかける必要がある。国連を雲の上の遠い存在にせず、身近に感じてもらうことが大切だ。そして学校や会社、企業が協力し合い、一人ひとりが国連の職員のように考えて、世界に貢献していくこと。それが小さな力と合体し、平和・幸せ・笑顔へとつながっていくと思う。

「笑顔」は人を幸せにするパワーを持った平和の象徴だ。自分の笑顔も家族の笑顔も、そして世界の笑顔も私たち自身で守っていくべきだと私は思っている。

特別賞(国際ソロプチミスト山口賞)

世界の平和と繁栄のため、国連が重視すべき取組

山口大学教育学部附属山口中学校1年

札幌 大暉(ふだば ひろき)

「本とペンを手にとろう。それが最強の武器なのです。」

二〇一三年七月十二日、国連本部でマララ・ユサフザイさんが堂々とスピーチをした。イスラム原理主義者・タリバンによって、頭を撃たれたにもかかわらず、奇跡的に助かった彼女が、イスラム社会で否定的な女子教育の必要性を訴えた『マララ・デー』から1年以上が経った。

世界は、変わったのだろうか？

変わるどころか、パレスチナ自治区ガザでは国連運営の学校が砲撃され、少なくとも小さな子供やその母親を含む十五人が亡くなった。イスラエル軍とイスラム組織・ハマスの戦闘は、停戦の見通しが立っていない。ウクライナでは、親ロシア派武装勢力とウクライナ軍との戦闘が続く中、クアラルンプールに向かっていたマレーシア航空機が撃墜された乗客乗員二百九十八人の命と夢は、ウクライナ上空で一瞬にして灰となった。世界は、再び東西冷戦時代にでも戻りかねないくらいだ。9・11以来、アメリカは、テロへの恐れや、自国の経済の悪化などの理由により、『世界の警察』では無くなってきている。また、ロシアは、国連を無視して親ロシア派に武器を供給し、暴走し続けている。

国連憲章が定める国連の目的の中に『国際の平和と安全を維持すること』というものがある。国連創設からの六十年の間にも、戦争や紛争がいくつも生じている。しかし、世界中をまきこむような戦争には発展していない。それは、国連が平和維持部隊を派遣したり、外交と交渉を通じ、関係当事者と粘り強く話合ってきたからだ。でも、まだたくさんの世界の人々の命が奪われ、たくさんの人が傷つけられている。

「世界平和」世界の完全なる平和はまだほど遠いのかも知れない。

マララさんは、タリバンの子供達の教育の必要性を語った。彼女の国連本部での、スピーチの目的は、すべての子供達に教育が与えられる権利の主張にあったと思う。教育こそが世界を変えられると彼女は信じている。

もし、武力を使ってでも世の中を変えようとするタリバンの人達すべてが、教育を受けていたのなら、アメリカの同時多発テロ、それからマララさんが銃で頭を撃たれるということもなかっただろう。

僕は今、国連が重視し、早急に対応すべき取組は「教育」だと思う。世界では六千百万人の子供達が、小学校にも通えない。学校に通えない子供達のために、学校の建設を行ったり、環境づくりを、もっと推進すべきだと思う。

教育によって、お互いを理解し合うための方法を多く見つけられるようになる。自分の考えをしっかりと相手に伝えることができるようになる。何よりも命の大切さ重さを知れるようになる。そして、真の平和とは何かを考えられるようになる。

戦争や紛争は、当事者達にやめる意志がなければ解決が難しい。だから、戦争や紛争地域の子供達にこそ、教育が必要なのだ。教育を受けた子供達は、武力による解決からは何も生まれないことを知るからだ。

戦争や貧困、人権の侵害は、今も多く見られる。世界における国連活動の重要性は、減るところか大きくなっている。

国連の機関のユニセフに、かつて日本の子供達も救われた。戦後、食料事情が悪化していた日本のために、ユニセフから粉ミルクが贈られた。二〇一一年、東日本大震災の際も、日本はユニセフから支援を受けている。

問題解決のために粘り強く話し合うこと、あきらめないこと、たゆまない努力が国連に求められている。積極的にみんなで協力すること、かかわり続けることが大切なのだ。

佳作

東日本大震災の経験を踏まえ、日本が国連で果たすべき役割

宇部市立藤山中学校3年

磯崎 純也(いそざき じゅんや)

二〇一一年三月十一日、私は嘘かと思間違う本当の情景を映したテレビを食い入るように見ている。波に呑み込まれてゆく人間の営みを見ていると、私たち人間は自然の前ではなんと無力なのかと思知らされた。

あの日からもう三年が経つ。いや、まだ三年だ。今ならまだ、私たちの脳裏にあの日の記憶が確かに残っている。

地震大国日本で起こりながらも未曾有の災害だと騒がれたこの地震のこと。そして、その経験からどのような貴重な教訓を得たかということの世界に発信していくことは私たち日本人の役割であり、使命なのではないだろうか。

いつ、どこで起こるか分からないのは震災の他の自然災害でも言えることだ。人間は初めて経験することには無防備だ。しかし、一度経験したことであれば解決策を見出すことができる。それを踏まえた上で私たちには三・一一の悲劇を繰り返さないための教訓を世界に発信していく使命があると思う。

そこで、私は特に二つのことを伝えたい。

一つ目は「油断してはいけない。常に意識すべきだ。」ということだ。自然災害はいつ、どこで起こるか分からない。世界には、地震に縁のない国や地域もある。地震だけではない。その他の自然災害に対しても、まさか自分の身に起ころうとは思ってもみない人は多いはずだ。

私が住んでいる山口県は、地震が少ないところだ。だからいつも、地震なんて起こらないと思こんでしまう。そして、その思いこみの上に安心している。もし、今地震が起きたらひとたまりもないだろう。

気を抜いてはならないということを一人一人が強く意識する必要がある。

二つ目に、必ず伝えなければならないことがある。

今回の大地震で、過去の地震の経験を生かして助かった人々のことが報道されて

いた。私の心に残っているのは「戒めの石碑」のことだ。宮城県の海岸にはあちこちに石碑が立っているそうだ。それらの石碑は過去の津波等で水が到達した最高地点を示している。津波の被害が大きかった三陸海岸には、「ここより下に家を建てるな」と書き込まれたものもある。そのような先人からの戒めに従ったことで多くの人が津波の被害をまぬがれた。

そこからも見出せることを二つ目として伝えたい。「備え、被害を食い止めることはできる。止められなくても、防ぐことはできる。」ということだ。自然の前では無力であっても私たちには備える力がある。先人に学び、備えたことで被害は食い止められた。そんな力があることを私たちは震災から学んだ。

「戒めの石碑」が表すように、過去から今へと語りつがれていくことには大きな意味がある。語りつぐ、伝えるということにはそれほどの力がある。その力をもって、日本人は教訓を伝えてきた。しかし、それは日本の中でしか行われてこなかったのかもしれない。

日本は大震災を経験した。そこで得た教訓や経験は、日本の中でのみ伝えていくべきものではない。すべきは惨劇を繰り返さないために、この事実を余すことなく世界に発信していくことだ。時が経ち、次第に歴史に埋もれ、忘れ去られたとしても、経験した国の責任として語りついでいくことこそが日本が世界で、国連で果たすべき役割だ。そして、このことは経験した者が言うからこそ重みがあり、説得力がある。どんな国が言うよりも日本が言うことの方が大きな意味をもつ。日本でも、世界でも三・一一の惨劇を繰り返さない。そのために伝え続け、そのための力となる。これは、日本にしかできないことだ。

佳作

もしも私が国連事務総長なら、国連で何をすべきか

周南市立菊川中学校3年

上田 滉也(うえだ こうや)

七億七千四百万。この数字は世界中の成人のうち読み書きができない人の数。一千万人。過去十年に戦争によって死亡した子供の数。これらの数字をユネスコのサイトで見たとき、僕の頭の中は真っ白になった。なんて数なのだろう、と。

僕が国連事務総長になって最終的に果たしたいことは人口の現状維持だ。こう思った理由はある衝撃的な本に出会ったからである。その本には世界の人口推移のグラフがあった。人類が誕生してから千九百年に至るまでは低いなだらかな丘を登るように人口は増加してきた。しかし、千九百年から二千年の間は崖を思わせる急激な増加だった。日本だけで見れば人口は減少傾向にあるが、世界に目を向けると毎日二十五万人の子供が誕生している。このたった百年の間に人口はそれまでの十数万年の間に積み上げられた数の六倍に上った。この急激な人口増加は地球に致命的なダメージを与えている。例を挙げると、地球温暖化、食糧不足、水質汚濁、オゾン層の破壊・・・など多種多様である。このペースで増加し続けると人類はそう遠くない将来に滅びると予想されている。

このようになった原因は二つあると僕は思う。一つ目の原因は医療技術が急速に進歩し出生率が年々増加しているからだ。しかしそれ以上に大きな原因がある。それはアフリカなど発展途上国における「貧困」だ。こう思う理由は次の通りだ。アフリカなどでは先進国などへの原料輸出が主な産業である。しかしそれらの原料は公正な価格で買い取られておらず、生産者が得る利益は非常に少ない。このような環境ではよりたくさんの利益を出すために原料を多く生産しなければならない。そこで労働者として働くのが子供だ。生産に従事しなければならないため彼らは学校に行けない。そして彼らが大人になると生活するために子供を働かせ・・・という風に負のスパイラルが続いてゆくのである。

ではこのスパイラルを断ち切るためにはどうしたらいいのか。僕は解決策を二つ思いついた。

一つ目はそれらの国の経済発展を支えることだ。これを進めるために民間ではフェアトレードという試みが行われている。これは先進国が発展途上国で作られた原料を正当な価格で買い取ることだ。この商品は他のものと比べると少し割高だ。しかしこのまま僕らが何もしないと負のスパイラルは断ち切れない。だから少し高くてもこれらの商品を僕らは買うべきだ。

二つ目はそれらの国での教育の推進だ。経済が発展するためには十分な知識が必要である。しかしアフリカなどでは子供のころ教育を受けることができず言葉の読み書きができない人が大勢いる。このような状態では経済が発展するはずもない。だから先進国と同じ水準の教育をすることが必要だと僕は思う。これらの教育とは別に最終目標である人口の現状維持のため性に関する正しい教育も行いたい。アフリカなどでは避妊に関する正しい知識が広まっていないとある資料で読んだ。だからこの教育を行うことで人口増加が少しでも抑えられると予想できる。

ある有名な曲で「私たちは地球自身だ、私たちは一つなんだ。」と歌われていた。その通りだ。これからの世界に求められていることは「多数の家族」ではなく「一つの家族」になることだと思う。遠いどこかで家族が苦しんでいるのなら、「家族」である僕らは助けてあげなければならない。これ以上現実から目をそらすことはできない。「国」という枠を超えてどこかの家族のことを一人一人が想おう。そうすれば貧困など軽く飛び越えられると思うのだが、あなたはどうか。

佳作

もしも私が国連事務総長なら、国連で何をすべきか

下関市立菊川中学校2年

福隅 彩可(ふくずみ あやか)

皆さんは、今、世界で最も必要とされる事は何だと思えますか？

もちろん、たくさんの方がいるのだから、たくさんのお見解があると思えます。

しかし、世界に必要な事は、「毎日を平和に暮らすこと」ただ一つだと思えます。

我々日本人にとっては当たり前のお事ですが世界に目を向けて見て下さい。毎日多くの人が戦争や紛争、内戦の犠牲となり、いつ攻撃されるかわからない不安定な状態で暮らしていたり、食糧不足により餓死していたり……。少し日本から外に出れば、そのような景色も少なくないと思えます。

これらのことを踏まえた上で、私が最近気になっている世界情勢は、ロシアとウクライナのクリミア半島を巡る争いです。みなさんも見たことがあるのではないのでしょうか。私自身、あまり詳しいことは知りませんが、日に日に対立は増していくばかりに感じます。

しかし、対立がひどく、他国もあまり動けていないようです。また、報道されていないだけで、世界中でもっとたくさんのお悲しい事が毎日繰り返されているのでしょうか。この事に関して、私はもし自分が世界平和を司る存在であるのなら、どのような事を行うべきだろう、と考えました。

まず第一に思いついたのが、各国は武器を捨て、主張しすぎないという事です。もともと世界に鉄砲などの武器は無かったのに、何故、今は武器であふれ返っているのでしょうか。きっと、昔から人々は領地の多い国は強い国と考え、領地拡大のためならどんな手段も方法もためらわなかったからでしょう。ですが、私はそんな事は一つも無いと思えます。狭い領土でも、人々が幸せなら、それが真の強い国だと思うからです。

第二に考えたのは、戦争や紛争で得るものは何か、という事です。昔は日本も戦

争に参加していましたが、第二次世界大戦の敗戦後、やっと得たものは何も無かったという事に気付いたのだと思います。だからこそ、戦争で得るものは何かというのをしっかり考えてほしいです。逆に言えば、戦争で失う「物」や「者」の方が大きいのではないのでしょうか。建物が壊れたり、自然が壊れたりもしますが、家族やたくさん大切な人を亡くすのは、何よりも辛いと思います。よく、少年兵となった子供は、自分が武器を持っている姿がかっこいい、と言っていますが、それを聞くと私は本当に悲しくなります。戦う事以外に何も楽しみがないのですから。つまり、戦争とは、大人の勝手な理由で多くの人の命や子供たちの本当の楽しみまでを奪ったりする、世界で何よりも許されない事だと思います。

私の考えた案は以上の二つの事ですが、できることなら今すぐにでも戦争や紛争などの争い事を止めたいです。

そして、その夢が叶った時に、人々は安心して毎日を過ごせると思います。すぐにはそのような日が来なくとも、一度止めた事を二度と繰り返さない事が、平和への第一歩だと思います。

そして、私の思う平和な世界とは、人々が「真の幸せ」とは何か、ということをしかりと考え、お互いの心を尊重し合えることではないかと思います。

佳作

世界の平和と繁栄のため、国連が重視すべき取組

山口市立川西中学校3年

村田 智美(むらた ともみ)

「直線ばかりのきれいな地図だね。」

社会の宿題をしていた私に、妹が言った。アフリカの地図。経線、緯線にそってまっすぐにひかれている。なぜまっすぐなのか。その理由を考えていく上で平和のための取り組みについて述べたい。

アフリカは十九世紀後半、ヨーロッパ諸国によって植民地支配を受けた。アフリカ大陸にある国で植民地支配を避けられた国はなく、どの国も一度は他国からの支配を経験している。ヨーロッパ諸国は、その国の民族分布や文化を無視し、自分達で勝手に国境線をひいてしまったのである。その結果、民族紛争は今も絶えることなく起こり、政治的・経済的統合が難しくなって貧困問題をかかえてしまった。

私達は平和である。戦争もないし、国も豊かだ。好きな人がいて、好きな事をして、好きなものを食べる。学校には友達がいる、勉強や部活に励む。悩むこともあるけれど、これが私にとってあたりまえの日常だ。でも、この私のあたりまえは同じ年のアフリカの子ども達のあたりまえではない。戦場にかり出される子もいれば、十分な食べ物を食べることができない子もいる。多くの子ども達が家族のために働き、学校に行ったことのない子がほとんど。きっとアフリカの子ども達は、私達のあたりまえを想像できないだろう。しかしこれは、決してあってはならない違い。平和は、たくさんの方が努力しうみ出したものだ。だから、平和はもともとあったのではなく、人々の手によってつくられたもの。つまり、アフリカ、いやどんな国にも、平和は訪れるものなのだ。そしてすべての国になくってはならないものである。

平和。簡単に書いたがすぐにやって来るものではない。そこで私は平和に一歩近づけるように、次のようなことを考えた。一つ目は、男女を問わず、あらゆる子ど

も達が各地で初等教育を受けられるようにすることである。こうすることで、自分の住んでいる国や、地域などに関心が持てる。政治、経済、文化などの知識が得られ、自分の意見を持つようになる。学校にはたくさんの子がいるので、自分と同じ意見の子を増やす。そしてその子達が大きくなって国を変えていく。このように、教育を受けることにより平和な国づくりができると思う。二つ目は、より積極的に募金のためのコマーシャルをすることである。多くの学校を建てるには、たくさんのお金が必要不可欠である。そのためには、テレビやラジオなどたくさんの人が、見たり、きいたりするもので積極的に呼びかけるとよいと思う。そうすれば、人々がアフリカについて関心を持ち、より多くのお金を募金してくれるかもしれない。東日本大震災の時もよくテレビで募金についてのコマーシャルがあったが、その時と同じような感じで放送するとよいと思う。以上が私の考えであり、平和と繁栄のため、国連が重視すべき取り組みだと思う。

アフリカの地図。まっすぐにひかれた線。これは、植民地支配という出来事があったてつくられた線だ。長い年月がたった今でも、その時に発生した争いは続き、貧困問題は解決していない。果たしてこのままでよいのか。もちろんよいわけがない。全ての子どもは平等なのだ。全ての子どもはみな、同じように扱われなければならないのだ。平和、争いや戦争がなく、世の中がおだやかなこと。日本もかつては戦争をした。多くの人が犠牲になった。だがしかし、日本は平和を取り戻した。平和は取り戻せるものなのだ。アフリカだって同じである。今は多くの問題をかかえているけど、たくさんの方が協力すれば、きっといつか解決し、平和な毎日が訪れるはずだ。そのためには、まず自分でできる募金や呼びかけなどをやっていこうと思う。私のあたりまえが、みんなのあたりまえになるように。

佳作

もしも私が国連事務総長なら、国連で何をすべきか

宇部市立川上中学校3年

若佐 理菜(わかさ りな)

私は六歳の時、父の仕事の関係で約一年間アメリカに住んでいた。その間、地元の小学校に通った。はじめは、肌や目の色、話す言葉も全く違う異国であるという壁があるように思えた。しかし思いのほか、みんなとてもフレンドリーですぐに仲良くなり、毎日の学校生活はとても楽しいものだった。

クラスには、私のように外国から来た子もいた。ヨーロッパや南米、そして日本に近い中国や韓国の国籍をもった子もいた。そのためか、学校では自分達の国の文化を紹介するイベントが行われることもあった。私は日本人のコーナーでお好み焼きをつくった。日本の味が外国人に受け入れてもらえるのか少し不安だった。食べてくれた子が、

「おいしい。今度つくり方教えて。」

と言ってくれた。その時、私はとても嬉しかったことを今でも覚えている。お好み焼きは大好評だった。

私も、メキシコ人のコーナーでタコスを食べたり、インド人のコーナーでは額に赤い点（ビンディ）を描いてもらうなど各国の催し物コーナーをまわった。その時私は思った。「世界には数えきれないほどのすばらしい文化がたくさんある。もっとほかの国について知りたい。自分の国日本の魅力を世界中の人々に知ってもらいたい。」

約一年間という短い期間だったが、私はたくさんのもので得ることができたと思う。人種や宗教などの違いはあっても心が通じ合えること。世界には、私の知らない文化がたくさん存在するという事。

同時に二つの課題もみつかった。自国の文化を世界に広く発信していくこと。他国の文化の理解、国際交流を深めていくことだ。

もし私が国連職員なら、この二つの課題についての取り組みを積極的に行っていきたいと思う。

私は、これまでいくつかの「文化」という名の宝石の存在を知ることができた。しかし、それらはまだ磨かれていない原石のままだった。日本も同じである。本当はキラキラと輝くダイヤモンドなのに、磨かれていないから輝きを放つこともなく、そのすばらしさに周りにはなかなか気づかないのだ。

グローバル化が進む現在、世界は様々な問題を抱えている。環境、平和、資源、貧困……これらは一国で解決できるものではない。今も世界では紛争が絶えない。また、貧困や戦争、女性であるという理由で教育を受けられない子もいる。新聞でそのような記事を見かけるたび、心が痛む。他国との交流を深めることにより、これらの問題の解決に少しでもつながるのではないだろうか。笑顔の絶えることのない平和な世界への一歩になるかもしれない。

国連は異なる国籍をもった職員が多く、国際交流において先頭に立つリーダー的な存在だ。その国連という機関が主体となって、問題解決や目標に向かって努力していくべきだと思う。

今、私にできることはないだろうか。どんな小さなことでもいい。これまで私が体験したこと、感じたことを行動に移すべきだと思う。例えば、毎月学校に世界の国々についてかかれたポスターをはる。学校の新聞にそのようなコーナーをつくり発行する。そうすることによって、生徒に興味・関心をもってもらう。地域で行われる文化交流イベントに、積極的に参加するなどできることはたくさんある。

自国のことを知る、知ってもらう。他国との交流を深める。決して難しいことではない。たとえ人種、宗教、言語など違いはあっても、皆同じ地球に生きる人間なのだ。

私が国連職員なら、国際交流の重要性について日本や世界に訴えていこう。そして、日本と世界を結ぶ架け橋になりたい。

第21回

高校生による国際交流体験感想文コンテスト



優 秀 作 品 集

特賞(山口県知事賞) 二度目の挑戦

山口県立下関中等教育学校6回生

金子 穂佳(かねこ ほのか)

私は、10月24日から28日までの5日間、韓国の済州島で行われた「第4回済州国際フォーラム」に参加しました。

実はこのフォーラムへの参加は、今年が2回目でした。去年は、とっさに英語が出てこなかったり、言う機会を逃したり、悔しい思いをしました。帰りの飛行機の中で、もっと英語を勉強して、また来年済州島に戻ってこようと決意し、今年、その夢が叶いました。

去年最も感じたのは、日本人は非常にシャイだということです。自分では社交的な性格だと思っていましたが、流暢な英語を聞くと、自分が話して会話が止まったら、と普段なら気にならないことが気になって、急に勇気が無くなってしまいました。そこで私は、早く打ち解けるための作戦を立てて臨みました。

例えば、名前が書かれたネームプレートをいつも首にかけるようにしました。海外の人は、人の名前の読み方やイントネーションをすごく気にするようで、私は何度も名前をきかれました。私の「ほのか」という名前は呼びにくく、覚えづらいのだそうです。そこで、人に会ったら挨拶を必ずして、自己紹介をしました。すると、「私の名前を誰が正しく言えるかクイズ」が始まり、2日目には、全員が私の名前を覚えてくれました。

滞在中は、サプライズもありました。昨年ルームメイトだった韓国の女の子に再開したのです。友達と目が合った瞬間、本当に驚きました。済州島の生徒は、このフォーラムに二度参加することができないのですが、友達は今回、スタッフとして参加していたのです。自由時間に、お互いの近況を伝え会いました。この再会は、最高のプレゼントでした。

そしてついに、去年最も悔しい思いをしたパネルディスカッションが始まりました。今年、去年以上にテーマについて調べ、自分の意見をまとめてパネルディスカッションに参加しました。

私のグループのパネルテーマは、「校内暴力を防ぐには」でした。私の意見は、被害者側にたったものでした。グループの多くは同じ意見でした。しかし、イラクの学生が「加害者も実は悩んでいるかもしれないよ」と言ったとき、そういう見方もあるのか、とはっとさせられました。その時の感覚を伝えることはとても難しいのですが、新しいものの見方を知り、自分の考えがもっと深まっていくのを感じました。英語を使うのではなく、英語で議論するとは、こういうことなのだと発見し、議論を楽しめるようになりました。

5時間の討論の後、パネル別発表の準備をしました。パネリスト13人で話し合い、私たちは劇で「Stop Violence」のメッセージをPRすることになりました。2時間たらずの準備で不安でしたが、全員が作った話をつなぎ合わせて、台本を作りました。みんなで冗談も言いながら、楽しく台詞を考えました。違う国籍の13人の意見を交えて、実際に台本ができたときは、感動しました。

また、劇中のダンスシーンの練習で、私がついていけなくて困っていたときも、みんなが私のペースに合わせてくれたり、何度も振り付けの復習をしてくれたりしました。そして、それぞれの国の文化や考え方を共有できて、私にとって、中身の濃い、あっという間の2時間になりました。

最終日は、19都市ごとに特技披露をしました。私たち山口県グループは、書道と茶道を披露しました。私は茶道を披露したので、後でたくさん質問されました。また、浴衣を着ていたら、「私も着てみたい」と言われ、着付けをしました。興味を持ってもらえて嬉しく思う反面、茶道以外の柔道、剣道、相撲などは、聞かれてもあまり答えられなくて、自分の国のことなのに知らないことが多いのを恥ずかしく思いました。海外の文化を理解するには、まず日本のことを知らなければならないと思いました。

帰国してからは、今でもSNSで連絡を取り合っています。あのイラクの友達は帰国後、学校中に「Stop Violence」「Respect Life」という張り紙をしたそうです。議論で終わるのではなく、実際に行動していることに感動しました。また、ハンガルのテストの勉強中に、どうしてもわからないことがありました。そこで韓国の友達にSNSで質問しました。深夜だったにも関わらず、友達は私ができるまで丁寧に教えてくれました。離れた今も、こうして友達とつながっていることがうれしいです。

このフォーラムに再び参加できたこと、そのためにサポートして下さった方々、行かせてくれた両親、濟州島で出会った友達、全てのことに感謝し、今度は私が、誰か

に新しい見方を伝えられるよう成長していきたいです。

特賞(日本国際連合協会山口県本部長賞) 未来の自分を見つめ直す

山口県立防府西高等学校2年

内田 有香(うちだ ゆか)

私は夏休みの三週間、防府市の姉妹都市アメリカミシガン州のモンロー市に親善大使として行ってきました。長い飛行時間の末アメリカに着き、アメリカの地に足をつけた瞬間「わあ、すごい！」私はそう言っていました。

見るもの聴くもの触れるもの全てに感動して、これから始まるアメリカでの生活に期待で胸がいっぱいになったことを今でも覚えています。

ところが一番初めにつまずいたのは、やはり言葉の壁でした。最初の数日間は、英語が上手く話せない自分が悔しくてもどかしかったです。でもホストマザーや地域の人々、市長さんは私の片言の英語一生懸命に理解しようとしてくれて、嬉しく思うと同じにこんなにも耳を傾けてもらっているんだから、頑張っただけで伝えなきゃと思いました。それからジェスチャーなども私の会話の一部として取り入れながら話すと、今までは英語を話すことだけに必死だった私がジェスチャーを使うことで、相手の目をきちんと見ながら笑顔でと色々なことを考えながらもスムーズに会話できるようになっていて驚きました。

だから私が思うことは、異国に行って言葉が通じない環境でもっとも大切なことは、「伝えようとする気持ち」だと思います。気持ちは、雰囲気や表情にも出るものだから大事にしなければならないと身に染みて感じました。

私は三週間の間、二軒のホストファミリーにお世話になることになっていて、どちらも母子家庭でした。一軒目のホストマザーは、カレンさんという料理上手で優しく大らかな方でした。私とカレンさんの二人だけでとても緊張していたけれど、面白いジョークで笑わせてくれたりして毎日楽しませてもらいました。一緒にショッピングに行った時私は驚いたことがあって、それはエレベーターで知らない人が乗ってきた時に「HELLO」と声を掛けることです。日本人だとかういった場面では、会釈で終わることが多いのではないかと思います。アメリカの人々を見習わなければと思う反面、日本とアメリカの文化の違いを改めて感じた出来事でした。それにカレンさんは、

「HELLO」だけでなく、それからの会話も盛りあがっていてコミュニケーション能力の高さも実感しました。カレンさんは、私の憧れの人物像そのものです。

二軒目のホストファミリーは、姉弟のうちお姉さんが独立していたので、ホストマザーとホストブラザー二人の三人暮らしでした。

この家庭での生活は毎日が冒険のようで、キャンプファイヤーやスケートをしたりと、私の家では絶対に味わえないような体験をさせてもらい、慣れない場所での生活にもストレスや悩みなど全くないほどリラックスして充実していました。

母子家庭で生活することによって家族にも色々な形があることを知り、また自分の家族のことを考えるいい機会でした。ホストファミリーはホームステイ中の三週間だけの家族ではなく、これからもずっと私の大切な家族です。

私がこの事業に参加しようと思った動機は、英語を学びたいという気持ちはもちろん、それ以上に海外に行ってみたいという好奇心があったからだと思います。それと、今しかできない何か変わった経験をしたいという思いが参加しようと思ったきっかけです。そんな気持ちで三週間も全く知らない人の家へ、しかも言葉も通じない所へ行きました。この三週間で私は、色々な視点から自分自身を見つめ直すことで、将来をはっきりとした形で思い描けるようになりました。今まであやふやだった夢が明確になったことで新たな目標が生まれました。これからは、夢を実現するために今何をすべきかを考え、行動できるように努力していきたいです。

私は今回のホームステイを終えて感じたことがあります。それは自分に自信がついたことです。三週間アメリカでの生活をやり遂げることができたのだから、大丈夫と考えることでどんな困難なことでも前向きに積極的に取り組めるようになったと思います。

そして、さらなる好奇心・行動力を強められたこの三週間は、私にとってかけがえのない出来事となりました。

この事業に関わってくださった全ての皆様への感謝の気持ちは一生忘れません。国際交流を通じて学んだことを未来の第一歩として生かしていきたいです。

優秀賞(公益財団法人山口県国際交流協会理事長賞)
韓国、「アジュ、チョアヨ」

野田学園高等学校3年

山縣 愛菜(やまがた まな)

ある時、私が所属している部活動の顧問の先生から「韓国の子のホームステイを受けてくれないか。」と言われた。この言葉が韓国に対するイメージを180度変えるきっかけになった。それまで私は韓国にあまり良いイメージを持っていなかった。

私の所属する部では毎年、日韓高校生交換留学がある。まず韓国の高校生が日本に来てホームステイをするのだが、受け入れ先の高校生が二日前にして熱を出してしまったのだ。そこで先生からあの言葉を聞き、引きうけることにした。海外の人が家に泊まるのは初めてのことだったので、当日まで小さな不安があった。そして当日になり、いよいよ顔を合わせる時がやってきた。何度も何度も頭の中であいさつの言葉を繰り返し、心臓が飛び出そうな程、緊張しながらその子に近づいた。目が合うと満面の笑みでこっちを見てくれた。私はその時、今まで考えていた言葉が全てとんで、笑い返すことしかできなかった。その子の名前は^{じゅんは}峻河という。峻河はとても積極的な女の子だったので、消極的な私にたくさん質問をしてくれて、私たちはすぐに打ち解けることができた。家に帰ってからたくさん話をした。韓国と日本では歳の数え方が違うこと、日本のキャラクターは韓国でも人気があること、日本に来て驚いたこと、お互いの言語のことなのだ。お互い相手の言葉は全く話せないが、携帯の翻訳と表情だけを観て会話した。その1日はとても濃い日だった。翌日の朝、峻河と別れるときに「アジュ、チョアヨ。」と勇気をふりしぼって言った。これは日本語で「大好き。」という意味だ。自分の気持ちを韓国語で伝えたくて、昨夜練習していたのだ。峻河はとても喜んで、ハグをしてくれた。また二ヵ月後に会うことを約束し涙を流しながら、お別れをした。

二ヵ月後、私は「韓国研修会」で韓国を訪れた。韓国は峻河を思い出させるような懐かしい、キムチのにおいがした。これから峻河に会えるという楽しみが胸を高鳴らせた。空港から対面式がある^{イルサン}一山まで三時間かけてバスで行った。バスの中から見える景色は新鮮で、日本と似ているようでどこか違っていた。目的地に到着すると峻河たちが拍手で出迎えてくれた。盛大な歓迎セレモニーにとっても感動した。その後峻河

の家へ行った。移動するときは必ず私の荷物を持ってきて、「私が持つ。」と言っても「だめ、だめ。」と言うだけだった。韓国人の相手を敬う気持ちは素晴らしいと思った。家に着くとお母さんとお姉さんは迎えてくれて、韓国語であいさつをすると微笑みながらあいさつを返してくれた。言葉が通じたことの嬉しさと、お母さんの笑顔で心が温かくなった。以前、峻河と話したときに「本場のチゲとプルコギとキムチが食べてみたい。」と私が言っていたのを覚えていてくれたようで、夜ご飯はそれだった。辛かったけれど、とてもおいしかった。ご飯の後はカラオケへ行くことになり、街へ出た。韓国の夜の街は、にぎわっていて、きらびやかだった。カラオケへ行くまでの道のりで何軒かお店に寄ったのだが、みんな日本人の私にとっても優しくしてくれた。カラオケでは、日本のノリのいい歌を歌うと峻河も気に入ったようで家に帰ってからも歌いながら踊っていた。この時には韓国という地に慣れて、韓国語の会話も少しずつ理解できるようになっていたのだ。寝るまでの間、以前のように話をした。しかし今回は楽しい話だけではなく日韓の問題についても話した。峻河は「韓国が悪いこともある。本当に恥ずかしい。」と言っていた。日韓の話はタブーだと思っていたので、少し驚いたが、峻河の言葉を聞いて、私たちが大人になる頃は日韓問題がなくなっているかもしれないという希望の光が差した。二人で日韓関係が良くなることを祈って、眠りに就いた。翌日のソウル散策では、優しい大学生が私たちを楽しませようとマジックを披露してくれたり、私たちが行きたい場所を探してくれたりした。最後にはおそろいのブレスレットを記念にプレゼントしてくれた。本当に嬉しかった。その日の夜はおそろいのブレスレットをしたまま寝た。翌日は朝の便で日本へ帰った。

私は、この研修で韓国人の相手を思いやる心、敬う心、情の熱さを肌で感じた。そして今までテレビ番組やニュースの情報が与える一つの枠の中でしか韓国をみていなかったことを痛感した。私が日本人だからといって嫌な顔をする人は一人もいなかったし、むしろとても親切にしてくれる人ばかりだった。峻河のように日韓が仲良くなることを祈っている韓国人もいると思うと幸せな気持ちになる。一つの枠で物事を捉え、自分の考えを縛るのではなく、自ら体験し、広い視野を持つことが大切だと思った。私は日本人と韓国人が互いの国を認め合い、「アジュ、チョアヨ。」と言い合える日が来ることを信じている。

優秀賞(山口県ユネスコ協会連盟会長賞)

「山口県高校生友好交流団に参加して」

山口県立下関中等教育学校6回生

三好 彩夏(みよし あやか)

10月20日から25日までの5日間、私は山口県高校生友好交流団の一員として、韓国に行く機会をいただきました。

2回ほど釜山に行ったことがあったので、私にとって韓国は、とても身近な国です。しかし、韓国の高校への訪問は初めてで、出発前は緊張と期待が入り交っていました。

到着後、私は慶尚南道の教育庁で挨拶をしました。韓国語での長いスピーチをしたことがなく、緊張から最後の一言を間違えてしまいました。訪問後にお褒めの言葉をいただけて、ほっとしました。これがきっかけで緊張をやわらげることができました。

今回の交流のテーマは、「文化」でした。そのため、ダンス、伝統音楽など、韓国の様々な芸術に触れることができました。私たち日本の交流団のメンバーも、巫女舞い、茶道、書道など、それぞれの特技を生かした発表を行い、改めて日本文化の幅の広さを実感することもできました。

訪問した先々で、私は韓国の民謡である「アリラン」の独唱をさせていただきました。正直なところ、現地の人々の前でその国の民謡を歌うというのは、とても緊張しました。そんな中、韓国の伝統楽器の演奏と一緒に現地で歌ったことは、私の人生の中で最も貴重な経験の1つになりました。

学校訪問で訪れた慶南芸術高校は、設備も学生の発表もすべてが本格的で、ここでの発表は特に緊張しました。最初の訪問先だったので、どんな話をすればいいのか、とても不安でした。しかし、ペアの女の子がいつも私の隣にいてくれて、自然と仲良くなりました。初対面なのに、彼女のおかげでいつもの自分を出せるようになりました。

金海第一高校では、学校の敷地内に入った瞬間、生徒たちが教室の窓から手を振ってくれて、少し照れくさかったけれど、韓国の学生は、こんなにストレートに歓迎の気持ちを表してくれるのか、と驚かされました。

明智女子高等学校では、農楽隊の人たちの演奏で歓迎を受けました。交流会では、生徒の皆さんがテコンドーなどを披露してくれました。逆に私たちの発表のときは手

拍子をしてくれて、場を盛り上げてくれました。また発表後もすぐに名前を覚えてくれて、笑顔がたえませんでした。

チャンポ総合支援学校にも訪問しました。日本でも総合支援学校に行ったことはないのですが、喜んでもらえるだろうかと、少し不安な面もありました。しかし、生徒さんたちも保護者の方々も応援してくれて、最後は会場にいる全員と一緒に踊っていただきました。

釜山では、韓国の学生と買い物をしました。お店をまわったり、楽しい時間を過ごしました。その分、別れがとてもつらかったです。でも「三好、バイバイ！！」と笑顔で言ってくれたので最後まで笑顔でいられました。

今回の訪問では、今までの旅行と違い、韓国の方々と直接かかわる機会が多くありました。しかも、韓国の方々の普段の姿を見ることができました。韓国の高校生は、身がまえたりしないで、積極的でたくさん話しかけてくれました。日本語がペラペラな人もいれば、片言の日本語で話ししてくれる人、英語で話してくれる人、身振りをつけてくれる人など様々でした。

私は韓国語を学んでいますが、言葉が伝わるか不安で、自分から話しかけることができませんでした。しかし、韓国の高校生は笑顔で何度も私の名前を呼んでくれて、私も笑顔で話すことができました。

言葉だけがコミュニケーションの方法ではないと、訪問を通じて思いました。言葉が通じるかどうかよりも、韓国の学生のように、どれだけ相手の中に飛び込んで、積極的に関われるかが大切なのではないかと思いました。

今回、晋州博物館で韓国の歴史についても学びました。日本との関わりとして、主に豊臣秀吉の朝鮮出兵に関する展示物がありました。自分が授業で習ったことよりも詳しく被害を知ることが出来ました。この博物館に行っていなかったら、日本側からの偏った知識しか持ってなかったのだと思うと、いろいろな目線で物を見ることの大切さを感じました。こうした過去を見つめることは大事だと思います。でもそれ以上に、心から私たちを迎えて下さった韓国の方々に、私たちが温かさのお返しをすることも大事だと感じました。これからも韓国語の勉強を続けて、この旅で出会えた韓国の人たちと交流を続けたいと思います。そして、私なりに「小さいけれど強い韓国と日本の架け橋」を作りたいです。

今回、貴重な経験を与えて下さった全ての方に感謝します。ありがとうございました。

特別賞(国際ソロプチミスト山口賞) 未来のために

高水高等学校2年

那須 浩子(なす ひろこ)

学校の英語の教科書で、女性と子供についてのある話が出てきた。水が入っている大きなタンクを肩に担ぎ、暑い中何十キロもの道のりを、毎日何往復もかけて運ぶのだ。初めは何気なく読んでいたが、それを行っているのは女性と子供たちであるということを知り、この話が私の中で印象に残った。

授業でこの話をやっている時、あるニュースが耳に入ってきた。今年四月、ナイジェリアで250人を超える女子高生がテロ組織に拉致された事件だ。この事件で多くの人の命が奪われ、未だ220人以上の女子高生が行方不明だという。あまりに強烈なニュースであり、考えただけで恐ろしいと思った。

一つ目の教科書の話と二つ目のナイジェリアのニュース。これらはどちらも「女性」と「子供」が関係している。どうしてこれから大人になって、この世界を支えていかなければならない子供たちが教育を受けられないのだろう。どうして女子高生が拉致されたり、女性が働くことのできない不平等な社会があるのだろう、と私は疑問に思った。

これらのことが起こっている多くの国は発展途上国だったり、貧しい国である。一つ目の原因は環境だ。家庭が貧しいため止むを得ず子供たちは働かなければならないので、学校に通うことができない。そして、学校が家の近くにないため、通いたくても学校に通うことのできない子供たちが大勢いる。教育を受けなかった子供たちが犯罪を犯したり巻き込まれる。それでは悪循環にしかならないし、犯罪は増えていくばかりだ。だから、その国だけの問題だと決めつけるのではなく、私たちにも何かできることはないか考えることが大切だと思う。

二つ目の原因は男女の差だ。これは昔から変わらずあるもので、なかなか難しい問題だと思う。日本でも昔は男女差別があり、女性は不利な状況にあった。現在やっと男女の差がなくなりはじめ、女性が活躍できる社会になってきた。国や世界が平和を目指すためには、まずは男女の差をなくし、男女平等な社会を目指すべきだと思う。

私は将来、難民救済をする仕事に就きたいと思っている。そして、誰もが教育を受

けることのできる環境をつくりたい。年齢、性別など関係なく、一人一人が教育を受けられ、勉強できることの楽しさを伝えたい。地球に生まれてきた時から人と人は繋がっていて、そして世界も繋がっているのではないだろうか。「一人の子ども、一人の大人、一冊の本、一本のペンが世界を変える」これはマララ・ユサフザイさんの言葉だ。ひとりの力では本当に小さな力でしかないと思う。一人の人や一つの物が集まり、それが力を合わせ協力し合えば、やがて大きな力となり、世界を少しずつでも変えていくことができるのではないかと思う。ひとりの力は決して0ではないのだから、小さな力が大きな力となるよう自分ができることを見つけ実行したい。だから私は自分の夢を実現するために、日々の学校の授業や生活を頑張ろうと思う。

佳作

オーストラリア語学研修旅行を終えて

山口県立下関中等教育学校4回生

石飛 哲平(いしとび てっぺい)

今こそ一年生から三年間学んできた英語学習の成果を見せるときだ。どれくらい現地の人に自分の英語が通用するだろう。ワクワクした気持ちで、僕は3月9日の早朝、重たいスーツケースを持って海峡ゆめ広場に向かいました。語学研修旅行に出発した僕たちは、中継地点であるシンガポールを経由して、次の日の午前7時頃、目的地オーストラリアに到着しました。

しかし、シンガポール上空で、早くもアクシデントに遭遇しました。機内のテレビの不具合のお詫びに、僕だけ商品券をもらっていたので、レーザーポインター付き高級ボールペンを機内で買ったのです。このとき僕は、とても気分のよい状態でした。入国審査も無事終了し、いよいよ本物のオーストラリアだと期待の胸をふくらませて、高級ボールペンをいじりつつ、他の生徒の審査の完了を待っていました。

ふと肩をたたかれました。振り向くと、空港の職員らしき大柄な男性が、僕に対して英語で何かをまくし立てています。先生もやってきました。どうやら、空港内でのレーザーポインターの使用は禁止だと言っているようです。そして税関の職員の方は、「ついてこい」と言いました。僕は税関に連れていかれました。その結果、ペンは没収、書類にサインしただけで済みました。しかし、空港で使ってはいけないものを機内で売っていることがおかしいと思い、主張しました。しかし、僕はそれを完璧に伝えることができないばかりか、相手が言っていることの半分も理解できませんでした。この旅行で、この時ほどもどかしい気持ちになったことはありません。

この経験を通して僕が学んだことは、悪銭は身につかないということ、レーザーポインターは海外の空港では使わない方がよいということ、もっと英語のボキャブラリーを増やし、もっとたくさんの英語コミュニケーションの経験を積まなければ、自分の意見すら正確に伝えることができないということです。ジェスチャーなどは確かに有効かもしれませんが、それだけでは正確には伝わらないと痛感しました。

ブリスベンに到着してからは、大きな事件も無く、生まれて初めての異国を楽しみました。ブリスベンは、オーストラリア第三の都市ですが、予想以上に都市部はせま

く、車を走らせると、すぐに緑豊かな郊外になる美しい街でした。日本と比べ圧倒的に広いその国土に、日本の約6分の1の人口しかいないせいか、マンションはなく、大きな一戸建ての家がほとんどでした。左側通行で日本車が予想以上に多く走っていて、僕のホストファミリーの車も日本車でした。まるで、「少し外車が多い日本」といった雰囲気でした。

僕のホストファミリーは、肌の色と夕食のカレーの辛さ、そしてそれを手で食べていたマザーから察するに、インド系オーストラリア人でした。彼らは、毎朝紅茶を飲んでいました。子供のDaleとJavenはクリケットを実際にプレーするだけでなく、テレビゲームでもするほどのファンでした。彼らの生活は、イギリス・インドの文化を強く感じられました。また、街中を日本人である僕が歩いても目立ちません。文化が共存し、ときに混ざり合って独自の色を形成している「多文化国家」の姿を、初めて肌で感じました。

以前の僕は本で得た知識しかなく、異文化を実際に体験したことはありませんでした。苦い経験も含め、実際にこの目で見て、肌で感じたものは、僕の知識に色を与え、生き生きと血の通ったものに変えてくれました。

しかしこれと同時に、この9日間を通して異文化に触れただけでなく、日本固有の文化についても、以前より理解が深まったように思います。また、これまでと全く異なる海外の日常生活の中に身を置き、不思議なことですが、僕は逆に、今までなかった「日本人としての誇りと自覚」が芽生えたような気がしました。僕たち日本人は、日本の個性や魅力をどれくらい認識しているのだろう。この語学研修を通じて、僕はもっと日本という国について学びたいと思いました。そして学んだことを、国境を越えて共有しあうのに十分な語学やコミュニケーション能力を、これからの学生生活の中で身につけたいと心から思いました。

来年の夏、僕は世界スカウトジャンボリーに語学ボランティアとして参加します。どこまで自分の英語が通用するか、今度はどんな文化と混ざり合えるか、そして代わりに、僕はどれだけ世界の人々に日本のことを発信していけるのか。オーストラリアでの経験を糧にして、準備をしていこうと考えています。

佳作

日本とオーストラリアの食文化のちがい

慶進高等学校2年

上原 葵(うえはら あおい)

私が六日間のオーストラリアへの修学旅行で最も興味を持ったのは、日本との食文化のちがいだ。国が異なるので食文化が異なるのは当たり前のことなのだが、そのちがいがあまりにも大きく、驚いた。特に驚いた点が三つある。

まず一つ目は、飲み物のちがいだ。日本ではレストランで食事をする際、お水を頼むと無料でもらえることがほとんどだ。しかし、オーストラリアのレストランでは水も有料だった。それに、オーストラリアの人々は食事の時に水を飲まず、ジュースばかり飲む。私はオーストラリア滞在中、日本のお茶が飲みたくなった。また、オーストラリアの人は常に飲み物を飲んでいるという印象を受けた。家にいる時はいつでも目の前にコップを置いているし、出かけた先でも必ずジュースを買って飲んでいった。しかし、日本のように水筒を持って出かけることはないようだった。私は、オーストラリアのようにレストランでミネラルウォーターを有料で頼んだり、水道水を簡単に飲むことができないのは不便だし、嫌だと思った。無料でお水がもらえて、水道水も安心して飲める日本は幸せな国だと思った。実際にオーストラリアの降水量と日本の降水量を比べてみると、オーストラリアは年間平均534mmで日本は1168mmだった。世界の平均年間降水量は880mmで、日本が世界平均を大きく上回っていることが分かる。日本に住んでいると、雨が降るのは当たり前のことだが、雨がめったに降らず、水不足に苦しむ国もあることを忘れてはいけないと思った。

二つ目は、間食の多さだ。日本では間食をあまりしない。家にいる時は、3時や10時に間食をする人もいるかもしれないが、それ以外の時間に間食する人は少ないだろう。しかし、オーストラリアの人は時間に関係なくチョコレートやポテトチップスを食べていた。夕食や昼食の前だからお菓子を食べないようにとホストマザーから言われなかった。反対に、お菓子をすすめられることの方が多く、驚いた。その代わりなのか、夕食や昼食の量はあまり多くなく、品数も日本のように多くなかった。しかし、夕食後のデザートはとても豪華で、日本とは大きく異なっていると感じた。調べてみると、オーストラリアは肥満率が25.1パーセントと世界17位の高さだった。

しかし、日本もオーストラリアとあまり変わらず22.4パーセントだった。このことから、食生活は健康に少ししか影響しないのではないかと思った。

最後に三つ目は、食事の仕方だ。私はホームステイ二日目の夕食でチーズバーガーを食べたのだが、それはレストランで食べたのでファーストフード店で食べるハンバーガーのようではなかった。包み紙はなかったし、パンの間にはたくさん野菜などの具がはさまれていた。一緒にナイフとフォークが出されたので、私はそのナイフとフォークを使って食べていた。すると、ホストファミリーの一人が、手を使って食べていいと言ってくれた。そこで私は、テレビ番組のグルメリポーターがレストランの大きなハンバーガーをナイフとフォークで食べていたのを思い出した。日本では料理を直接手で食べることは少ない。ハンバーガーならまだしも、魚のフライを手で食べると行儀がよくないと思われるだろう。しかし、オーストラリアの人はフィッシュアンドチップスを食べるときも手で直接だった。国によって食事のマナーも大きく異なるのは分かっていたことだが、実際にその差を体感するととても興味深いものだった。

このように短い間の滞在で様々なことを見て、感じて、海外にもっと行ってみたいと思った。日本では当たり前のことでも当たり前ではないし、日本では見たこともないものもたくさんあってとてもおもしろかった。ショッピングモールは、大きすぎて回り切れなかったり、街並みは映画の中のようにかわいかったし、もっと長く滞在したいと思えるような国だった。オーストラリアの人は、出会った人はみんな笑顔がすてきで気さくで一緒にいて楽しい気分になった。だから、オーストラリアは日本と同じくらい良い国だと思った。次にまたオーストラリアに行くときは、今よりもっと英語力を上げて、外国人の方ともたくさんコミュニケーションがとれるようにしたい。そして、オーストラリア以外の国にも訪れてみたい。また機会があれば留学し、食文化以外の海外の文化にも触れたいと思う。

佳作

韓国での出会い

野田学園高等学校3年

岡田 美胡(おかだ みこ)

「近くて遠い国」と言われているように、日本と韓国の距離は、大阪から沖縄までの距離とさほど変わりません。しかし、ひとつ海を越えた向こうの世界は、ここ日本と比べて、人々の生活、習慣、考え方などが全く異なる世界でした。私が韓国研修旅行から学んだことについてお話します。

空港からバスで移動し、長い時間をかけてやっとホームステイ先の子、ミンジに直面しました。はっきり言って、ミンジの第一印象はあまり良いものではありませんでした。ずっと俯いてケータイを触っていて、私が話しかけても素っ気なく返事をするだけでした。私のことが嫌いなのかなと思ったくらいです。しかし、それは完全に私の偏見であったことが後になって分かりました。ただ少し人見知りなだけで、ミンジは私が話すと必ず私の目を見て話を聞き、常に私の体調を気遣ってくれました。海外では表現の仕方や、伝え方が日本とは少し違うことに気づきました。ミンジの表現の仕方を理解できたとき、本当に心の優しい子だと気づきました。

対面を終えた後、私達はミンジの家に向かいました。ミンジのお母さんは明るく気さくな方でした。お母さんが作ってくれたビービーメンをミンジとミンジの友達のジニョンと三人で食べました。韓国の料理は辛いのが当たり前だと思っていましたが、日本人の私が食べられるように甘い味つけにしてあって、お母さんの優しさをととてもうれしく感じました。

夕方になるとお父さんが私たちをトンカツのお店に連れて行ってくれました。鈍感な私はトンカツ専門店なのに、サブメニューであるカルボナーラを注文してしまい、後悔していました。しかし、それに気づいたお父さんが自分のトンカツを分けてくれ、他のも頼んでいいよと、気遣ってくれました。ミンジによく似て、シャイで優しい素敵なお父さんでした。

夜には、日本のインターアクトの友達と、ミンジとミンジの友達六人でカラオケに行きました。韓国の子達と一緒に歌うなど、一生に一度の貴重な体験だったと思います。私も韓国の歌を歌って、もう二度とない六人での時間を思い切り楽しみました。

この三日間で私はたくさんのはじめてに出会い、たくさんの韓国人の優しさに触れました。長いようで短いこの時間で、今まで知るであろうこともなかった韓国人の良いところを肌で感じることができました。

最近ニュースで日韓問題が話題となることが多くなっています。その影響で、韓国に対するイメージがあまり良いものではなくなった日本人が数えきれないほどいると思います。しかし、テレビからの情報だけで、韓国という国を一括りのイメージで捉えてほしくありません。実際に自分の足で現地へ行くと、自分の目で韓国という国がどんなところなのかを確かめることができます。そうすれば、今までの自分たちの韓国に対する考えが180度転換すると思います。もっとたくさんの日本人に韓国の良さ、韓国人の優しさを知ってもらいたいです。

韓国では電車で年配の方に席を譲るのは当たり前のことだそうです。実際、韓国の電車に乗った時に、学生のような若い人はほとんど席に座らず立っていました。韓国人が目上の方を尊敬しているのが感じ取れます。年上の人を敬うことは、現代の日本人に足りないことのひとつだと思います。また、行動力、積極性、自己主張、ダメ元精神。これらは、韓国人に当たり前にあって多くの日本人に不足しているものです。日本人が韓国人のように、「私はこれがやりたい!」「これをしよう!」という積極性をもつだけで日本という国が大きく変わってくると私は思います。

私は将来、海外の人に日本人の文化の素晴らしさを伝える仕事に就こうと思っています。この韓国研修旅行を機に外国人という考えが消え、私たちはみんな地球に住む地球人なのだという感覚をもちました。もっと海外に関わっているいろんな国のいろんな文化に実際に触れてみたいとも思いました。今までの自分を見つめなおし、足りなかった部分をこれから学んでいこうと思いました。

今回の研修での一番の収穫は、ホームステイでミンジやミンジの家族の方々に出会い、韓国という国を身近に感じる事ができたことです。このことが私の心を開き、韓国の文化、価値観の違い、コミュニケーションの取り方などたくさんを学ばせてくれました。この三日間の出来事は一生忘れません。韓国研修旅行で出会ったすべての人に心から感謝を伝えたいです。

佳作

交流で学んだこと

萩光塩学院高等学校2年

齊藤 由希(さいとう ゆき)

私の学校では毎年、修学旅行は海外に行き、現地の学生と交流をすることになっている。私達はマレーシアのジョホールバールの学校を訪問した。交流では現地の学生とペアになり、一対一で学校案内をしていただいた。私とペアになった学生は私と同じ年の女の子だった。最初は二人とも緊張していて、はにかんでいるだけだった。コミュニケーションはすべて英語だということは聞いていたし、自分でもわかっているつもりだった。しかし、いざ自分から話そうとすると英語が全く出てこない。自分の拙い発音で通じるのだろうかという不安、間違った英語を使ったときの恥ずかしさ、海外の方と話すときの緊張、さまざまな思いが会話をしようとする気持ちを塞ぎこませてしまった。心の中でもやもやしているうちに、名前しか紹介することができないまま現地の学生からの出し物が始まってしまった。

マレーシアは多民族国家なので、訪ねた学校にはマレー系、中国系、インド系の生徒が通っていた。そのため出し物もそれぞれ特徴の違ったものを見ることができた。日本ではそのような光景はあまり見ることはできないので、私はとても不思議だと感じた。そう感じたのはこの学校だけではない。マレーシアの町並みを見ていても不思議だと感じた。見渡してみるとマレー系、中国系、インド系の人々、お店、食事、生活風景、文化。さまざまなものが一つになって、マレーシアという国が成り立っていた。小さな国なのに大きな国だった。私はマレーシアが大好きになった。今、世界では宗教の対立による戦争・紛争があとを絶たない。お互い憎しみ合うのではなく、マレーシアのように、さまざまな宗教の人々がお互いに認め合えば、争いもなくなるのではないだろうか。そんなことを考えながら、出し物を見ていた。

出し物が終わると、マレーシアの学生との交流が始まった。出し物で見せていただいた演技を実際に体験してみたり、マレーシアのボードゲームをしたりと、とても充実した時間を過ごすことができた。ボードゲームでは、ペアの人とだけではなく、他の学生とも一緒に交流をすることができた。マレーシアの学生は、英語に不慣れな私達のために、ゆっくりと繰り返して、丁寧にゲームの説明をしてくれた。私がゲーム

に勝てば一緒に喜んでくれて、ゲームに負ければ一緒に悲しんでくれて、本当に楽しい時間を過ごすことができた。ゲーム体験が終わると、自由時間になった。自由時間になるとペアではない学生から声をかけられ、一緒に写真を撮ることになった。その学生はとても積極的で、すぐに連絡先を交換することになった。他の学生ともそんなやりとりをしているうちに、自由時間も残り僅かとなった。『まだペアの人とあまり話せていない。絶対に仲良くなって帰りたい。今が最後のチャンスだ。』そう思い、私は思い切って話しかけることにした。話しかけると、ペアの人は、笑顔で優しく話してくれた。『どうして私はあんなに悩んでいたのだろう。何をあんなに恥ずかしがっていたのだろう。ペアの人はこんなにもいい人なのに……。』もやもやしていたことをとても後悔した。結局、時間が少なくて、話したいこともろくに話せないまま自由時間は終わってしまった。

お別れの時間。移動のバスまでの間、少しだけ話すことができた。だんだんバスが見えてきて、本当にもうお別れなのだと思っていた瞬間、ペアの人が私に ‘I will be missing you.’ と言った。たった一言。それだけなのに、胸がきゅうとなるほど嬉しかった。そして寂しかった。この先マレーシアに行くことがあるかどうかはわからない。そう考えると、もう二度と会えないような気がしてとても悲しくなった。彼女の一言は、お別れの挨拶で言うには当たり前のことなのかもしれないが、私にとっては本当に嬉しかった。あまり二人で会話ができなかったにも関わらず、あんなにも思いやってくれてもう感謝の気持ちしかなかった。ペアの人とは連絡先を交換したが、日本に帰ってからまだ数回しか連絡をとっていない。

私は修学旅行で、人の出会いは一期一会だということを学んだ。いつ会えるかわからない、もしかしたら会えないかもしれない。そんな中で出会えたことは、本当に奇跡だと思う。そして、出会い以上に難しいのは、関わりを深めていくことだ。お互いに努力しなければ、友情は育っていかない。

彼女との出会いを、ここで途切れさせてしまったら、間違いなく私は後悔するだろう。彼女との出会いを、これからも大切に育んでいきたい。まずは、あの子に連絡をとることから始めてみよう。

佳作

何よりも大切なこと

高水高等学校2年

吉川 歌織(よしかわ かおり)

どの国の人もイエス・ノーの意思表示がはっきりしている、それが今までの国際交流体験を通じて感じたことです。

以前私は、オーストラリア、中国、韓国、アメリカ、そしてスペインの人と交流する機会がありました。私は交流の度に、相手の外国人と仲良くなるために、まずは様々な質問を投げかけてみるのですが、今までの交流でその質問に対しての返答が曖昧だったことはなかったように思います。しかし、なにもこれだけの事で外国人は意思表示がはっきりしていると思ったわけではありません。いくらシャイな人の多い日本人でもこれくらいのことは出来ると思います。問題は、いくつもの選択肢の中でどれが良いのか決められない、という状況の時です。私を含む大抵の日本人はきっと「何でもいい」と当たり障りのないことを言うてしまうと思います。日常生活で何か問いかけた時、「何でもいい」と返されてしまうと、どこか投げやりな感じがしてしまって、場合によっては相手の気分を害してしまいます。一方で、以前交流したアメリカ人女性は同じような状況になった時、「あなたはどれが良いと思う？」というような返答をしていました。内容自体は日本人の「何でもいい」と大して差もないのですが、何故か後者の方が感じ良く聞こえました。曖昧になりがちな返答でも曖昧に感じさせない、という点がすごいと思うと同時に、育ってきた環境によって変わるものなのかなと思わず考えてしまいました。

そして二つ目は、何に対しても積極的だということです。以前に日本語があまり流暢に話せない中国人や韓国人と会話した時のことです。私が話題提供に困って必死に話のネタを探していた時、日本語を満足に話せないにも関わらず何でもないような顔で先に話しかけてくれました。しかも、途中でなんとさえいえばいいのか分からなくなっても表情は明るいままだったのです。私は英語を使って交流するという時は、つい出来るだけ正しい英語を使おうとして考え込んでしまいます。しまいには、考えているうちにもっと訳が分からなくなつて黙り込んでしまうという始末です。ですが、こうなってしまう人は私の周りにもたくさんいます。日本人のシャイな国民性も影響して

いるのかもしれませんが、やはり外国人の方達の積極性は見習うべきものがあると思います。

そして、私はさらに外国人のフレンドリーさにも感心しました。修学旅行でオーストラリアへ行った時のことです。英語の先生からの宿題で、現地で暮らしている人へインタビューをしてみよう、というものがありました。質問の内容は、出身地やおすすめの食べ物を教えてほしいなど様々でしたが、私の班のメンバー全員、どうやって話しかければ良いのか分からず、街の中をうろうろとしていました。そして、ようやく公園で本を読んでいる話しかけやすそうな男性を見つけました。少し強面で怖気付きましたが、意を決して近づくと、私たちに気付いたその男性は顔を上げてにっこりと笑いながら「どこから来たの？」と英語で質問してきたのです。それをきっかけに無事インタビューを終えることが出来ました。その他にも、道で偶然出会っただけなのに、目が合うと微笑んでくれる人が多かったりと、日本人にはなかなか実行できないようなことを当たり前にしてしまうオーストラリア人に驚きました。もしも日本がフレンドリーな人ばかりの国だったらきっとすごく違和感を感じるでしょう。ですが、オーストラリアの街の雰囲気羨ましくも思いました。

これまで、日本人には足りないと思うことをいくつか書いてきましたが、だからと言って日本の文化があまり良くないとは思いません。曖昧な返答は相手を気遣った結果ですし、あまり干渉しないというのも、相手のプライバシーを尊重しているためだと思います。今までの国際交流で感じたことは、先ほど書いたこともそうですが、一番はそれぞれの国にそれぞれの良さがあるということです。その良さというものは、それぞれの国でずっと昔から創り上げてきたものです。日本独自の良さというのも、世界に誇れるものだとは私は思います。外国に興味を持つことも大切ですが、他の国の人と交流した時に日本の良さを伝えられるよう、自分の国の文化にも目を向けてみようと国際交流を通じて思うことが出来るようになりました。

2014年度募集要項

第54回「国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト」山口県大会

■テーマ

作文の題目は、「もしも私が国連事務総長なら、国連で何をすべきか」、「世界の平和と繁栄のため、国連が重視すべき取組」又は「東日本大震災の経験を踏まえ、日本が国連で果たすべき役割」のうちいずれか一つとします。

なお、作文の内容は、学校、家庭、社会などにおける執筆者の学習や体験あるいは実践などを通し、国際連合について述べたものとします。

■原稿制限

400字詰め原稿用紙4枚以内（原稿には、住所・氏名・学校名・学年・年齢を明記してください。）

■賞

特賞：2名 優秀賞：2名 特別賞：1名 佳作：5名

第21回「高校生による国際交流体験感想文コンテスト」

■テーマ

題は自由。感想文の内容は、修学旅行やホームステイ、留学生との交流等の直接体験に基づき、その感想を述べるものとします。なお、生徒の国際交流体験は、概ね平成25年7月から平成26年8月までの間のものとします。

■応募資格

高等学校生徒（全日制、定時制、通信教育）及び高等専門学校生徒（ただし、3年生まで）

■原稿制限

400字詰め原稿用紙5枚以内（原稿には、住所・氏名・学校名・学年・年齢を明記してください。）

■賞

特賞：2名 優秀賞：2名 特別賞：1名 佳作：5名

共通事項

■締切

平成26年9月5日(金)(必着)

■審査と発表

主催団体において審査し、10月下旬に発表します。

■応募作品の取り扱い

①応募作品は返却しません。②入賞作品の著作権は、主催団体に帰属します。③作品は自作・未発表のものに限ります。④中学生による作文の上位入賞作品については、全国コンクールへ出品します。

■個人情報について

応募者の個人情報については、応募者の選考、連絡のために利用します。これらの目的の他に応募者の個人情報を利用することはありません。

■応募先・お問い合わせ先

〒753-8501 山口市滝町1-1 山口県総合企画部国際課内
日本国際連合協会山口県本部 TEL 083-933-2347
<http://unaj-yamaguchi.sakura.ne.jp/>

【国際理解・国際協力等各種コンテスト表彰式】

2014年11月16日(日)に開催した「国連フェスタ2014」において、優秀作品の表彰式を行いました。
※イベント詳細については、こちらをご覧ください。

http://www.unaj-yamaguchi.sakura/act/festa2014_houkoku.html

平成26年11月発行

発行元

日本国際連合協会山口県本部

〒753-8501 山口市滝町1-1

山口県国際課内

TEL (083) 933-2347



日本国際連合協会山口県本部